

ロマンラン

ジャン・クリストフ

26

世界文学全集

26

阿部書店

ロマン・ロラン
ジャン・クリストフ
1

片山敏彦訳

河出書房

カラー版 世界文学全集 第26巻

ロマン・ロラン ジャン・クリストフ I

昭和 41 年 12 月 15 日初版発行

昭和 44 年 7 月 1 日 3 版発行

訳 者 片 山 敏 彦

装幀者 亀 倉 雄 策

発行者 中 島 隆 之

印刷者 澤 村 嘉 一

印 刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定 価 850 円

製 本・和田製本工業株式会社

製 函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表 紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

目 次

ジャン・クリストフ

I

解 説	585
5 広場の市	379
著者とその影との対話	448
II	510
I	452
4 反抗	226
I ぐらつく砂地	265
II 埋没	321
III 脱却	379
3 青春	126
I オイラー家	160
II ザビーネ	191
III アーダ	226
2 朝	58
I ジャン・ミシエルの死	84
II オットー	109
III ミンナ	126
1 序 曙	5
I	12
II	28
III	58

巻頭口絵 ロマン・ロラン肖像（パステル・1964年）

高田博厚筆

本文カラーさし絵

ピエール・ルロワ

© Editions Albert Guillot, Paris

装 幀 亀倉雄策

ジャン・クリストフ 1

片山敏彦 訳

どの国の人々であれ
悩み そしてたたかっており
やがて 勝つであろう
自由な魂たちに
ささぐ

主要人物

ジャン・クリストフ 幼い時から音楽を愛し、不屈の精神をもったこの物語の主人公。

ジャン・ミシエル クリストフの祖父。剛気で廉直な、もと宮廷の音楽指揮者。

メルキオール クリストフの父。酒におぼれてヴァイオリニストの地位を失う。

ルイーザ 心やさしいクリストフの母。

ゴットフリート ルイーザの兄。貧しい行商人をしているが信心ぶかく、クリストフには親切なやさしい伯父。

ハスラー 幼いクリストフに感化をあたえた有名な作曲家。

オットー クリストフの最初の友となった富裕な実業家のむすこ。

ケーリッヒ夫人 クリストフの隣人である秘密顧問官の未亡人。

ミンナ ケーリッヒ家の娘、クリストフの初恋の少女。

オイラー老人 ジャン・ミシエルの友人で、クリストフ母子の家主。

フォーゲル 役場の書記をつとめるオイラー老人のむこ。

アマリア 勤勉で口やかましいフォーゲルの妻。

ローザ クリストフをしたっているアマリアの娘。

レオンハルト 聖職者志望のアマリアのむすこ。

ザビーネ クリストフと同じ建物に住む若く美しい未亡人。

ベルトルト ザビーネの兄。

アーダ クリストフの恋人となった町の女店員。

ミルハ アーダの女友だち。

テオドール 商館を経営するクリストフの伯父。

ロドルフ 商人志望のクリストフの弟。

エルンスト 意志の弱いクリストフの末弟。

マンハイム 雑誌「ディオニソス」の同人。富裕なユダヤ人。

ユーディット 知性的なマンハイムの妹。

コリンヌ 地方まわりをしている魅力的なフランス女優。

ラインハルト夫妻 クリストフの友。地方の学校教師。

アントワネット・ジャンナン 劇場でクリストフが同じ机敷に誘った娘。家庭教師。

シュルツ老人 クリストフの音楽を愛している大学教授。

モDESTA ゴットフリートに救われた盲目の田舎娘。

ロールヒエン 勝気な農家の娘。クリストフの女友だち。

シルヴァン・コーン（ハミルトン） クリストフの幼な友だち。パリで社交

界の流行児となっている。

ダニエル・ヘヒト 音楽出版社の支配人。冷淡なユダヤ人。

テオフィール・グジャール パリの音楽評論家。

コレット クリストフのピアノの弟子。富裕な実業家の娘。

リュシアン・レヴィクール 懐疑的な金持ちの文学青年。

アシル・ルッサン サロンに出入りする社会主義の代議士。

シドニー クリストフの隣室の親切な召使い娘。

オリヴィエ・ジャンナン 姉アントワネットに養育された。のちクリストフの親友となる。

『ジャン・クリストフ』への序

『ジャン・クリストフ』が世に出てから三十年になろうとしている。クリストフの友であり、クリストフに愛情をもっており、そして、一般にクリストフ自身よりも明識のある作家が、クリストフの質素な揺籃の上にうつむきこんで、クリストフに、おまえは一ダースほどの数の親しい人々の範囲から外へ歩み出ることにはなかうと予言したそのとき以来、クリストフはずいぶん歩いた。彼は地球を縦横に歩きつづけた。そして今では彼は地上のほとんどあらゆる言語によって物語る。ひどく珍しい衣装を着て、彼がそのかずかずの旅からもどつてくると、彼の父は彼をそれと認めることがなかなかむづかしいこととときどきあるが、彼の父もまたこの三十年間に、世界のいろいろな山道で、足の裏をずいぶんすりへらした。私が、まだまったく幼いクリストフを腕に抱き取ったときのこと、そしてどんな条件のもとに私の男の子がこの世に生まれ出ることを求めたか、それを私が回想するのを許されたい！

*

『ジャン・クリストフ』が私の心の中に生きつづけた期間は二十年以上である。最初の発想は一八九〇年の春、ローマにおいてであった。書き終わったのは一九一二年六月である。しかし仕事の全体はこれらの期間を越えている。私が一八八八年に書いた草案があるが、この時期

には私はまだバリのエコール・ノルマル(師範大学)に在学中であった。初めの十年間(一八九〇—一九〇〇)はおもむろに心の中で作品が孵化された時期であった。私は内心に育つ一つの夢に集中しながらも、目を見ひらいて、まったく別のいろいろな作品を書き上げていた——すなわち、『フランス革命劇』の初めの四つの戯曲(『七月十四日』『ダントン』『狼たち』『理性の勝利』)、『信仰の悲劇』(『聖王ルイ』『アエルト』)、『民衆劇論』その他。クリストフは、外から見ても見えないような、私の第二の生であったのであり、これによって私は、自分の最も深い自我との触れ合いを取り直していた。一九〇〇年の終わりまで私は、あるいくつかの社会的なつながりによってバリの『広場の市』に関与していた。そして私はクリストフと同様に、自分がそこで精神的にひどく疎遠であることを感じていた。女性がその子を胎内に宿すように、私が心の中に宿していた『ジャン・クリストフ』は私にとつては、奪取されることのない、私のブルク(城砦)であり、私の『静寂の島』であり、私は、敵意のある大洋のただ中で、ひとりこの島に上陸すべきであった。私は無言のうちに全力をこれに集中した——将来のわずかな格闘のために。

一九〇〇年以後、まったく自由独立の立場になった私は、私の魂の軍勢である夢たちを引き連れて、思いきって流れの中へ飛び込んだ。最初の呼び声は一九〇一年八月のある夜、『スイスの』シュヴィーツ県のアルプスの高処から投げられた。この呼び声を私はこんにちまで世に発表しないでいた。しかし無数の未知の読者がその声の反響を——私の作品の壁に沿うて響き返している反響をきき取った。それというのも、思想の中にある最も深いものは、声高く言い現わされるものではない、友らに、この作の源泉にあった悲劇的な友愛と、この雄々しいエネルギーの川が流れ出てきた始源である豊饒な悲痛感とを感じさせるには、ジャン・クリストフのまなざしだけで十分だった。

『嵐の夜の山中で、稲妻の火が描き出す円屋根の下で、雷鳴と風との荒々しいとどろきにつつまれて私は思う——すでに亡い人々を、やがて死ぬだろう人々を——空虚につつまれており、死滅に抱かれつつ回転しており、そしてまもなく死ぬだろうこの地球全体を。必ず死ぬ運命をもって生きているすべてのものに、私は、死ぬ運命をもってこの著書をささげるが、この書の声は次のように言おうとする——「兄弟たちよ、われわれはたがいに近づく。われわれをへだてているものを忘れよう。われわれみんなの共通の不幸のことだけを考えよう！ 敵たちは存在しない。悪人たちは存在しない。不幸な、みじめな人々だけが存在している。そして永続的な唯一の幸福は、われわれがたがいに理解し合うことによってわれわれがたがいに愛し合うことである。——知と愛、ただこれのみが、人生の先と後とにある二つの深淵のあいだで、われわれの暗黒に浴びせかけられる唯一の光明のきらめきである」

必ず死ぬ運命をもっているすべてのものへ——平等と平和とを与える死へ——生の無数の小川が流れ込む未知の海へ、私は私の作品と私とをささげる』

モルシヤツハ・一九〇一年八月

*

作品の決定的な引き締めを意図するよりもずっと前に、主要な挿話と人物たちについての草案が相当多く作られていた。クリストフの姿は一八九〇年から、グラチアは一八九七年から書かれた。「燃え立つ茂み」のアンナは一九〇二年じゅうにその肖像全体が書かれ、オリヴィエとアントワネットとは一九〇一年と一九〇二年とに書かれ、クリストフの死は一九〇三年に書かれた（それは、「曙」の最初の部分を決定的に書き始めるのにさきだつて一か月前のことだった）。

『一九〇三年三月二十日——今日私は『ジャン・クリストフ』を、決定した形で書き始める』と私が記したそのときには、私は麦の穂を選

り分けてきつちりと結んで束にしさえすればよかった。

『ジャン・クリストフ』を作るのに私が当てずっぽうに計画も立てずに仕事をしたかのように想像している、明察力の乏しい批評家たちの断言がどれほど虚妄であるかは明らかであろう。早くから私は自分が受けたフランス的な、古典的、エコール・ノルマル的な教育によって、たしかに構成への要求と愛とをもっていたし、またそれは私自身の血統のなかにもあるものだった。私は、ブルゴーニュの普請好きな人間どもの古い種族の子である。土台石をしっかりと置き、全体の大きい輪郭を決めてからでなければどんな作品にとりかかったことも私は決してない。最初のことばが紙に書き留められるにさきだつて、考えの中で作の全体が組み立てられたということについて『ジャン・クリストフ』はその最たるものであった。一九〇三年三月二十日というその同じ日に私は自分の草案の中で、この詩作品の部分けを決めた。私は明らかに十の部分——十巻を——前もって考えていた。そして今や決定した行数と、量と、つりあいとは、私がすでに書き留めていたものとあまり差がなかった。

これらの十巻の形を決める仕事に約十年かかった。一九〇三年七月七日に、スイスのジュラ山中のフロールク・シュール・オルテンで書き始められたが、これは後に「燃え立つ茂み」の、傷ついているジャン・クリストフが隠れ家を求めて行くその同じ場所であり、樅とぶなどの悲劇的な決闘からほど遠からぬ地点であった。——書き終えたのは一九一二年六月二日、マッジョーレ湖畔のパヴェーノにおいてだった。作の大部分はバリのカタコンブ（墓洞）を見おろす位置にある古ぼけた家——モンパルナス大通り一六二番地で書かれたが、この家は表側においては重い車両の通行と《都市》の絶えまないとどろきに揺り動かされていたが、その反対の側は、修道院の古い庭の、太陽に照らされている静寂にひたされていて、この庭には二百年もの齢をもつ樹木が何本もあり、それらの木々は、おしゃべりのずめたちと、くうくう鳴く山ばとたちと、快調の歌を歌う黒つぐみたちとに満ちてい

た。当時の私の生活は孤独な、不如意なものであり、友だちもなく、そして喜びといえ自分が仕事を通じて作り出す喜びのほかにはなく、その生活は、教授としての任務、論文を書くこと、歴史研究の仕事など、殺到するかずかずの勤めを背負っていた。生活の資を得るためのそれらの仕事の暇に、クリストフを書くために毎日一時間ずつを、またときどきはそれよりも少ない時間を使うことが私にはせいぜいであつた。しかしそれらの十年間に、クリストフが私の生活の中に不在の日はただの一日もなかった。彼は語る必要すらなかった。彼は事実としてそこにいた。作者は自分の影と対話をする。そして聖クリストフの顔が作者を見つめる。作者はその顔から決して目を離さない……

«Christofori faciem die quacunque iueris,
(in)
Illa nempe die non morte mala morieris»

*

物質上のどんな障害をも顧慮せず、また、フランス文学界においては是認されているあらゆる因習ときっぱりと手を切っているこの長編の散文で書かれた詩を、パリの私の環境の、冷淡で皮肉な沈黙の中で、私に意図させ書き上げさせるにいたつたその動機であるいくつかの考えを、ここに私は述べてみたい。この作が成功するかしないかは私にとつてほとんど重要でなかった。成功はまったく本質の問題ではなかった。内心の命令に従うことが本質的な問題であつた。

長い経路の途中、『ジャン・クリストフ』のために私が書いた覚え書きの中に私は次のような、一九〇八年十二月のことばを再び見いだす――

「私は一つの文学的な作品を書いているのではない。私は信仰の作品を書いている」

人間は信じているときには結果がどうであるかは顧慮せずに行動する。勝つか負けるかはどうでもいい。《しななければならないことをせ

よ！……」

私が『ジャン・クリストフ』によって引き受けた義務は、フランスの精神的な、また社会的な崩壊の一時代に、灰の下に眠っていた魂の火を再びめざますことであつた。そしてそのために、まず最初には、積もっている灰と塵埃とを掃除することであつた。空気と日光とを独占している《広場の市》に、あらゆる献身の用意をしており、どんな妥協からもしきぎよく身を持っている、少数の、不屈の魂の人々を対立させることであつた。彼らの先頭に立つ者となるような一人の主人公の呼び声に応じてその者のまわりに、私は彼らを寄せ集めたかつた。そしてそんな先達者が存在するためには、私はその者を作り出さなければならなかつた。

私はこの先達者に二つの根本的な条件を求めた――

一――ヴォルテールや百科全書家たちが「彼らの作品の主人公として描き」あの時代の社会の笑うべきことや犯罪やを、その淳朴な視力をもつて諷刺するために、パリへ来させた自然な本性の人々――あの《ユロン（無作法）な人々》――のような、自由な、明らかな、真摯な視力。現代のヨーロッパを見て判断するために私はそういう展望台を――すなわち兩つの正直な眼を必要とした。

二――見て判断することは出発点にすぎない。その次には行動である。おまえが考えていることを、おまえがじつさいにあるとおりを、おまえは敢行しなければならぬ。――それをあえて言え！ それをあえて実行せよ！ 十八世紀の《率直な人間》なら諷刺しているだけで十分かもしれない。しかし現代のきびしい格闘のためにはそれではきやいさに過ぎる。一人の英雄でなければならぬ。そうあるがい

い！

『ジャン・クリストフ』を書き始めた頃に同時に書いた『ペートル・ヴェンの生涯』の序文の中で私は、『英雄』についての私の定義を与えた。「力あるいは思想によつて勝つた人々に」私は『英雄』という名称を拒む。「心情によつて偉大であつた人々だけを私は英雄と呼ぶ。」

心情という、この語の意味を押しひろげよう！《心情》とは単にサンシビリテ（多感性）の地帯だけの意味ではない。私は心情を、内面生活の広大な領域だと考える。この領域を自由に用いて、この領域の要素的な諸力に基づいて生きる英雄は、敵たちの一世界に抵抗することができるだけの力をもつ。

私の英雄についての考えを私がもち始めた頃に、もちろんベートーヴェンというモデルが私に授けられていた。なぜなら、近代の世界の中で、また西欧の諸国民の中で、ベートーヴェンは、広大な内面の国の主人であるところの、創造的天才力に、あらゆる人間のなものである兄弟愛の心情の天才力を合一させた異例的な芸術家の一人であるから。

だが、ジャン・クリストフにベートーヴェンの一肖像画をみてどううとはしないようにくれぐれも用心していただきたい！クリストフはベートーヴェンではない。彼は新しい別のベートーヴェンであり、ベートーヴェンのなタイプの英雄であるが、ベートーヴェンが生きたのとはまた違う一つの世界の中へ、われわれの時代の世界の中へ投げ込まれており、そして自立的存在である。ボンの音楽家との伝記的な類似は、第一巻『曙』^{あけぼの}の中でのクリストフの家庭のもついくつかの特徴にだけ限られている。作品の初めの部分で私がこの類似を欲したのは、私の主人公のベートーヴェンのな血統を確定して、彼の根をライン地方のヨーロッパの過去の中へおろしておくためであった。私は彼の幼時の最初の日々を、古いドイツの——古いヨーロッパのある一つの雰囲気でつづんだ。だが木が大地から伸び出ると、それを取り巻くのは『現代』である。——そして彼自身は、全作を通じて、現代のわれわれの一人である——一八七〇年から一九一四年にいたる、すなわち西欧の一つの戦争からその次の戦争までのあいだの、あの世代の雄雄しい代表者である。

彼が成長した世界は、その後展開した幾多の大きな事件によって粉砕されたといえ、クリストフという樫^{かし}の木は今ももちこたえてい

ると私は信じる理由をもつ。嵐はこの木の枝を何本かへし折ったでもあろうが、幹はそのためにゆるぎはしなかった。私は毎日のようにその証拠を鳥たちによって得ている——世界のあらゆる国々からこの木に一つの宿りを求めに来る鳥たちによって。私が最も心を打たれる事実、そして私がこの作をつくつていたときの私の予想をひどく越えている事実は、『ジャン・クリストフ』がもはやどの国においても異邦人でないということである。最もはるかな土地、最も相違している諸民族、中国、日本、インド、両アメリカ、ヨーロッパのすべての国々の人々の中から——「ジャン・クリストフは私たちの同族です。彼は私と同族です。彼は私のきょうだいです。彼は私です……」と云いながら来る人々を私は見た。

そしてこのことが私に私の信仰の真実と、私が自分の努力の目的を達したということとを証明してくれた。なぜなら、私はこの創作の当初に次のような数行を書いた（一八九三年十月）——

《人間のユニテ（一如）がどんな多様な形をとって現われていようとも、常にその人間のユニテを示すこと。これが科学の第一の目的であると同様に芸術の第一の目的でなければならぬ。これが『ジャン・クリストフ』の目的である》

『ジャン・クリストフ』を書くために私が選んで採用した芸術的形式とスチール（様式）とについて、いくつかの考慮を私は述べておくべきであろう。なぜなら、その考慮のいくつかは、私がこの作品とこの作品の目的とについて持った考え方に密接なつながりがあるから。だが私は、私と同時代のフランス作家たちの大多数がいだいている審美上の考え方とは、まったく違う自分の考え方を述べる一つの『概論』の中で、それについていっそうくわしく論じてみるつもりでいる。

ここでは次のことだけを言うにとどめたい——『ジャン・クリストフ』のスチールは（人々は、またこのスチールだけに従って、不当に

も、私の他の作品全体について判断しがちであるが、「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」の最初の時期に、私の全部の努力とそして私の《コンミリト（戦友）》ベギーの努力とに靈感を与えていたところの主導的な考えにみちびかれていた。われわれがそれを極度に奉じていたところのあのきびしい、男らしい、しかし清教徒的な考えは、ぐらびみたくない一時代と一環境とへの反動から生まれていたが、それは次のようなものだった。

「率直に語れ！ 虚飾なく、てらいなく語れ！ 理解されるために語れ！ 文学上の趣味においてうるさい人々の一つの群れに理解されるためではなく、無数の人々に、最も質朴な人々に、最も謙虚な人々に理解されるために！ あまりに理解されすぎはまいかとの心配を決してもつな！ 影やとぼりで包むことなく語れ、明瞭にしっかりと語れ、やみがたいときには重苦しい話しぶりでもかまわない！ それによっておまえの足がいつそうよく地を踏みしめているのなら、それでいい！ そしておまえの考えをいつそうよく人々の心の中へ入れるために同じことばをくりかえすことがおまえのために有効であるなら、くりかえせ。それによつて人々の心に滲透させよ。そのばあいは別のことばを探そうとするな！ ただの一語も失われないようにせよ！ おまえのことばが行動として生きるといい！」

これらはこんにちでもやはり、現代の耽美主義に反対して私がその権利を要求するところの諸原理である。そして私は、行動を欲し、行動をになうような作品においてはやはりこれらの原理を適用する。しかしすべての作品においてではない。理解することのできる人なら、『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』とのあいだにある、技法の、芸術の、散文的調和の、倍音的諧和の、重要ないろいろの相違をみてとるだろう。『リリュリ』あるいは『コラ・フルニョン』のような、作の実質が、リズムと音色と交響との、またまったく別な動きと統合とを規定する作品についてはもちろんである。

『ジャン・クリストフ』の中だけでも、全部の巻が、作の初めの部分

を規定した要求へ、同一の厳密さで順応しているわけではない。初期のたたかいた清教精神は、以前に「旅の終わり」と題されていた第三群（「女友たち」「燃え立つ茂み」「新しい日」）の中では和らいでいる。私の主人公が飾を重ねることによって、しだいに彼の上に降りてくる精神のなごやかさとともに、作品そのものの音楽はいっそう複雑になりいっそうニュアンスのあるものになる。しかし世の定評の慣例は少しもそのことに注意を払わなかったし、一つの作全体、一つの生涯全体について——黒なり白なり——ただ一つの同じ判断をくだすことで満足している。

*

人々はやがていつか、私の覚え書きを集めてある箱の中に、『ジャン・クリストフ』の内側を説明するだろうようなたくさん記録を見いだすことだろう。とくに、「広場の市」と「家の中」とに描かれた当時の社会に関する記録を。それについて話すことは時期尚早である。

だが、最初の草案がもくろんでいて書かれないままになった一部分のことを言っておくことは、たぶん興味のあることだろう。それは「女友たち」と「燃え立つ茂み」とのあいだに置かれて一巻となるはずの、そしてその主題が「革命」であった部分のことである。

それはソヴィエトでこんにち勝利を得ている「革命」ではない。あの当時（一九〇〇年と一九一四年とのあいだに）「革命」は敗北していた。しかしこんにちの勝利者たちを作り出したのは昨日の敗北者たちなのである。

結局書かれないうままになったこの巻の、相当に書き進められていた一つの草稿が私の覚え書の中に現存している。この草稿の中で、クリストフはフランスとドイツとから放逐されてロンドンに亡命し、あらゆる国の亡命者たち、被追放者たちのいろいろなグループと交わる。彼は彼らのシェーフ（先達者）の一人と親交を結ぶが、それはマッシー

二あるいはレーニンのような資質の人物であり、偉大な道徳的人格である。この強力な扇動者は、その知性と信念と性格とによって、ヨーロッパのあらゆる革命主義運動の指導的頭脳となる。クリストフはドイツとポーランドとに突発したこれらの運動の一つに積極的に荷担する。これらの事件、これらの反乱、これらの革命家たちのあいだのたたかいと分裂との物語がこの巻の大部分を占めており、最後に「革命」は潰滅せられ、そしてクリストフは逃亡して、多くの危険を冒した後に、スイスへ移ることができた。そこで愛欲が彼を待ち受けていた。そして「燃え立つ茂み」が来る。

人間の世代の、この長い悲劇の結末として私はまた、一種の《自然の交響曲》を——“Meeresille”「海の静けさ」ではなしに、生の偉大な戦闘者が晴れ晴れとそらへ帰還する“Erdstille”「大地の静けさ」を書くことを計画していた。

《私はけっきょく——（と、私は書いた）——この人間的叙事詩の大団円を、私の「革命劇」の大団円にしようと考えているものと同じものにしたくなってしまう。——さまざまの情熱と憎しみが自然の平和の中にとけ込む。無限の空間の静寂が、人間の激動をつつみ、その激動は、一つの石が水の中に沈むように、静寂の中へ沈んで消える》

常に《ユニテ》の思想。人々相互の、また人々と《宇宙秩序》とのユニテ……

《Seid umschlungen, Millionen! Diesen Kuss der ganzen Welt!》
「抱き合え、無数の人々よ！ この接吻を全世界に与える！」

私は『ジャン・クリストフ』の結末に「愛と憎しみとのおどろかな結婚である《調和》を——前進する行動における、この力つよい均齊をむしろ選んだ。なぜなら『ジャン・クリストフ』の結末は、じつ

は結末ではなくて一つの宿場である。『ジャン・クリストフ』は決して終わらない。彼の死そのものが《律動》の一寸時にすぎず、大きな永遠の、息の一つの呼気にすぎない……

《いつの日にか私は再び生まれるだろう——かずかずの新しいたたかいのために……》

このゆえに『ジャン・クリストフ』は今もやはり、新しい幾世代の道づれである。彼は百度も死んでは常に復活し、常にたたかうだろう。彼は「たたかい、悩み——そして勝つだろう、あらゆる国々の、自由な男たちと女たち」の兄弟であり、またそうであることをやめないだろう。

ロマン・ロラン

レマン湖畔、ヴィルヌーヴにて

一九三一年・復活祭

(一)『ジャン・クリストフ』の最初の草案、覚え書き、下書きの全部は、二つの紙箱に収めて、一九二〇年にストックホルムのスエーデン・アカデミーのノーベル文庫に私からゆだねられた。ただし「アントワネット」の原稿だけは別に、ニヴェルネの田舎の故郷に保存されている。（私はそれを一九二八年に、ヌヴェールのニエヴル県の図書館に託した。）

(二)『ジャン・クリストフ』は最初「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」の十七冊として、シャルル・ベギーの手で一九〇四年二月から一九一二年十月までに出版され、その次に十巻としてオランダで出版所から出た。「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」の版にはその後削除されたいくつかの節が含まれている。（とくに、「反抗」の巻で、クリストフが若かったころのドイツの詩に関する一つの短いエッセーがはぶかれた。）

(三)各巻の書かれた年月は次のようである。

「曙」と「朝」 一九〇三年七月から十月まで。

「青春」 一九〇四年七月から十月まで。

「反抗」 一九〇五年七月から一九〇六年春まで。

「アントワネット」 一九〇六年八月から十月末まで。

「広場の市」 一九〇七年六月から八月末まで。

『家の中』 一九〇七年八月末から一九〇八年九月まで。

『女友だち』 一九〇九年六月から九月初めまで。

『燃え立つ茂み』 一九一〇年七月末から一九一一年七月まで。(一つの重大な偶発事とそして私の『トルストイの生涯』の著作とのために中断された。)

『新しい日』 一九一一年七月末から一九一二年六月まで。

(四)『広場の市』の巻の初めに『作者とその影との——ロマン・ロランとジャン・クリストフとの——対話』が置かれている。しかし、二人のうちのどちらが『影』なのかという疑いが(ことさら)残されている。

(五)『クリストフの顔』をおんみが見ているいかなる日にも、おんみは悪しき死を死なないだろう。——この銘は、中世期のかずかずの聖堂の入口の(そしてとくに、パリのノートルダム聖堂の入口の)聖クリストフの像の台石に刻まれてあるが、作者はこの銘を象徴的に採用して、『カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ』の初版においては各巻の終わりにつけた。

(六)このことに關して、私は読者が作中人物たちを実在の人々と同一視しないようにと告げておかなければならない。『ジャン・クリストフ』はモデル小説ではない。實在した諸事件あるいは諸人物を目ざしていることがしばしばだといえ、この作には、過去と現在とのモデルによるただ一つの肖像画をも含んではいない。だがどの作中人物も、もちろん人生のおびただしい体験と回想とに養われて作られながら、創造の仕事の中で鈍直されて、変えられている。にもかかわらず、現代の多数の有名な人たちが、私の書いた諷刺画に彼自身の姿を認め、そして私に根づい憎しみをいだいたが、その結果は一九一四年の戦時に、私の『擾乱を立ち越えて』が世に出た機会に、もしくはこれにかこつけて表面に出てきた。

(七)當時私は『マッチャーニの生涯』を書く準備をしており、これは私の『英雄的な伝記』の中に加えられるはずであった。そのための記録を私はすでに数年間集めていた。ここで物語るのは時宜を得ていないような幾多の理由から私は、この伝記を書く計画を中止した。

(八)ベートーヴェンが作曲した、ゲーテの有名な詩の題——『海の静けさ』

(九)『革命劇』へのこの結末はその後書かれた。『獅子座の流星群』がそれである。

(一〇)ベートーヴェンが作曲した『第九交響曲』の中に入れた、シラー作の『歓喜へのほめうた』の中の詩句。

(一一)『ジャン・クリストフ』の最後の場面を参照のこと。

(一二)臨終のジャン・クリストフの最後のことは。

Dianzi, nell' alba che precede al giorno,
Quando l'anima tua dentro dormia……

PURG. IX.

しばし前 昼に先だつ 曙の頃
汝が魂 なおも身うちに眠りいしとき……

ダンテ・神曲・煉獄篇・第九章

I

Come, quando i vapori umidi e spessi
A diradar cominciarsi, la spera
Del sol debilmente entra per essi……
PURG. XVII.

しめりたる濃き霧の
淡くなり初めて その中に
日の光の箭 力なく射し入ることく……

煉獄篇・第十七章

家のうしろから、川のつぶやきが高まる。一日じゅう雨が窓ガラスをたたいていて。窓のこわれている隅で、雨水の流れの一筋が窓をつたってしたり落ちる。黄いろっぽい昼の光が消えてゆく。部屋の中は、うす暗くてうっとうしい。

生まれたばかりの子供が揺籃の中で身うごきする。老人が部屋には

いつて来たとき戸口で木靴を脱いだのだが、それでも老人の歩くたびに床がきしむのである。赤ん坊は泣き声をたてはじめる。それをあやすために母が寝床から身をのり出す。そして祖父は手きぐりしながらランプをともしに行く。赤ん坊が目を見ましたとき闇におびえないためである。ランプがつくと、老ジャン・ミシエルのあから顔が、こわい白いあひげと、気むずかしげな表情と、いきいきとした目とともに照らし出される。彼は揺籃に近づく。彼の外套はしめったたにおいをただよわし、そして彼が歩くとき、彼はへりのついた大きな青いスリッパを引きずる。ルイーザは、彼に、あんまり近よらないようにと、合図をする。彼女の髪の毛はほとんど白いいつもいいようなブロンドである。顔つきはやつれていいる。羊みtainな柔らかな顔にはそばかすがある。青ざめて厚いくちびるはちゃんと合わさることがなく、内気な微笑を浮かべていいる。彼女は赤ん坊を見まもっている。彼女の目はたいそう青く、そのまなざしはほんやりとして、ひとみはほんとに小さな、しかし、かぎりなくやさしい点である。

赤ん坊が目を見ままして泣く。何を見ているともないその目つきがしきりに動く。なんというおそろしさ！ 暗やみ、ランプの荒々しいきらめき、混沌のなからやつと出て来たばかりの一つの頭脳のなかのさまざまな幻覚、周囲の、息づまるような、そして動いていいる夜の暗さ、底なしの暗さ、そのなかから鋭い感覚と痛みと化け物じみた幻とがまぶしい光線のように出てくる。これらの巨大な顔々が彼の上に身を傾ける。これらのまなざしが彼をつらぬき、彼のうちにはいりこむ。そしてこれらの目は彼にとってはわけのわからないものである！……彼は泣き叫ぶ力もない。こわさが彼をくぎづけにして動けなくさせる。彼は目と口とを開けて、のどの奥であえぐように息をしている。いやに大きなはねばった顔が、哀れなおかしなしかめつらになつてしわばむ。顔と手の皮膚は褐色で、紫色をおびていて、黄いろっぽい斑点がいくつもついている……

「やれやれ！ なんて醜いやつだ！」と老人はほんとうにそう思ひこ

んでいるというような口調でいう。

彼はランプをテーブルの上に置きに行った。

ルイーザはしかられた小娘みたいにすねた顔つきをした。ジャン・ミシエルは横目で彼女を見ながら笑い声をたてた。

「この子が美しいとわしに言わせるつもりではあるまいな？ おまえだってそうは思っていないまい。まあいいさ。おまえの咎じやないんだ。赤ん坊というものはみんなこんなものさ」

赤ん坊はランプの炎と老人のまなざしのせいで、麻痺したように身うごきがでなくなっていたのだが、やがて声をたてて泣きはじめた。おそらく子供は、母の目のなかに一つの愛撫を感じ、そしてその愛撫が彼に泣く勇気を与えたのである。母は赤ん坊のほうに両腕をさし出して、そして言う。

「わたしによこしてください」

老人はいつもの習慣に従って、まず理屈をのべたてることから始めた。

「子供が泣くとき、子供のいうとおりにはだめだ。泣くだけ泣かしておかなければいけない」

しかし、老人は歩み寄って子供を抱き、そしてぶつぶつ言った——

「こんな醜いのは見たことがない」

ルイーザはわななく両手で子供をとって、自身の胸にあてて隠すようにした。彼女は恥じているような、しかし、またうれしきで有頂天になっているような微笑を浮かべて子供を見つめた。

「おお！ かわいそうなちっちゃなわたしの坊や」と、彼女はまったく恥ずかしそうにいう。——「なんておまえは醜いんだろう！ なんてわたしはおまえが好きなんだろう！」

ジャン・ミシエルは暖炉のかたわらにもどって、むつつりした顔つきで火をかきたてはじめた。しかし、彼の顔つきの不きげんそうな堅苦しきはある一つの微笑によって裏切られていた。

「な、おまえ」と彼は言った。——「苦にやむことはないよ、だんだ

ん変わるものだからな。それに醜いってかまいはしない！ この子に望むことはただ一つ、それはひとりの人間らしい人間になつてくれるということだけだ」

子供は母のからだのぬくみを感じると、泣かなくなった。むさばるように乳を飲む音がきこえた。ジャン・ミシエルはいすのなかで軽く身をそらせながら力を入れてくりかえした。

「正直な人間以上にいいものは何もないからな」

彼はこの考えをそれ以上縝密に発展させることはこの場合ふさわしくあるまいと考えて一瞬間だまりこんだ。しかし、もうなんにも話すことがなくなつたので一瞬の沈黙の後にふたたび、いらいらした調子で言った。

「おまえの夫はなぜここにいないんだ？」

「きつと劇場だと思えますわ」とルイーザはおずおず言った。「下稽古があるのですから」

「劇場は閉まつている。わしは今その前を通つて来た。またしてもあいつはうそをついている」

「いいえ、いつでもあのひとのとがにしないでくださいまし！ わたしがきき違えたのかも知れません。きつと出稽古のためにまどつているのですわ」

「帰つて来ていなければならんはずだ」と老人は不満足を示して言った。

一瞬間彼はためらつたが、今度はいつそう低い声でいくらか恥じらうように尋ねた。

「あいつは……またしても？」

「いいえ、お父さま、そんなことはありませんわ、お父さま」とルイーザはせきこんで言う。

老人は彼女を見つめた。彼女はそのまなざしをきけた。「それはほんとうではない。おまえはうそをついている」

ルイーザはだまつて泣きだした。

「ああ！」と老人は叫んで、暖炉を足でけた。火かき棒が大きな音を立てて落ちた。母と赤ん坊はびっくりして身をふるわした。

「お父さま、後生です」とルイーザが言う。「この子が泣きだしますから」

赤ん坊は泣けばいいのかそれとも乳を飲みつづければいいのかと数瞬間まどつていた。だが、両方を同時にすることはできないので、乳を飲むことをまたやりはじめた。

ジャン・ミシェルはときどき腹立たしさがひらめき出る、いつそう押えた声で言いつづけた。

「わしはなんの因果であんな酔いどれむすこを持ったのか？　ありとあらゆる不自由を忍んで、わしのような生活をするのはたいへんな苦勞だった！……おまえには、おまえにはどうしてもあいつの酒をやめさせられないというのか？　けっきょく、そりやおまえの役目だからな。おまえがあいつを家庭に引き止めることができればな！……」

ルイーザは泣きつづけていた。

「もうこのうえわたしをしろしないでくださいまし。そうでなくとも、わたしこんな不幸なんですよ！　わたしにできるかぎりのことはいたしました。自分ひとりである時、わたしはどんなにこわい思いをしているか、お父さまが知ってくださいたら。いつでもあのひとの足音が階段に聞こえるような気がするんです。するとドアが開くのわたしは待つて、おお！　どんな姿であのひとが帰って来たのだろう？……とわたしは考えます。それを思うとわたしは病気になるんですよ」

彼女はすすり泣きに身をふるわせていた。老人はおちつかない気持ちになった。彼女のそばに来て、はずれていた肩掛けをふるえている彼女の肩に掛けてやり、大きな手で彼女の頭をなでた。

「よしよし、もう心配しないがいい、わしがいるから」

ルイーザの気持ちは赤ん坊のことを考えてなごんだ。そしてむりに笑顔をしようにとした。

「あんなことを申しあげて、わたしが悪うございました」

老人は頭を振りながらルイーザを見つめた。

「おまえがかわいそうだ、わしがおまえにやった贈りものは、いい贈りものじゃなかった」

「それはまた、わたし自身のあやまちなんです」と彼女が言う。「あのひとはわたしと結婚してはいけなかったのです。今ではあのひとはそれを後悔しています」

「何をいったい後悔しているというのだ？」

「それはお父さまによくわかりですわ。お父さまご自身もわたしがあのひとの妻になったことを怒っていらした」

「それはもう言わないことにしよう。そのとおりだ。わしはいくらも不満だった。あのような男の子——こういってもなにもおまえの気にさわることもあるまい——わしが大事に育て、りっぱな音楽家ではんどうの芸術家であるあんな男の子は、おまえのようになんの持ち物もなく身分も違い職業さえもないものとは違った女をめとることもできたわけだ。クラフト家の人間が音楽家でもない娘と結婚するなぞということは、もう百年以上このかたなかったことだ。——だがしかし、おまえにもよくわかっていとおおり、わしはそれをおまえにたいして恨みに思っていないし、またおまえという人をよく知ってみると、おまえにたいして愛情をもつようになったのだ。それに一度決まった以上は、もうあととどりはできない。自分の義務を正直につくすだけのことだ」

彼は暖炉のそばへもどって腰をおろし、少し間をおいてからくりかえして言った。その言い方には彼が格言的なことをいうときにはいつでもそうするようなきびしさがあつた。

「人生で一ばん大切なことは、自分の義務をつくすことだ」

彼は抗弁を待ち受けながら火のなかにつばを吐いた。それから母も赤ん坊もなんら抗弁はしなかったので、さらに言葉をつづけようとしたが——しかしだまりこんだ。